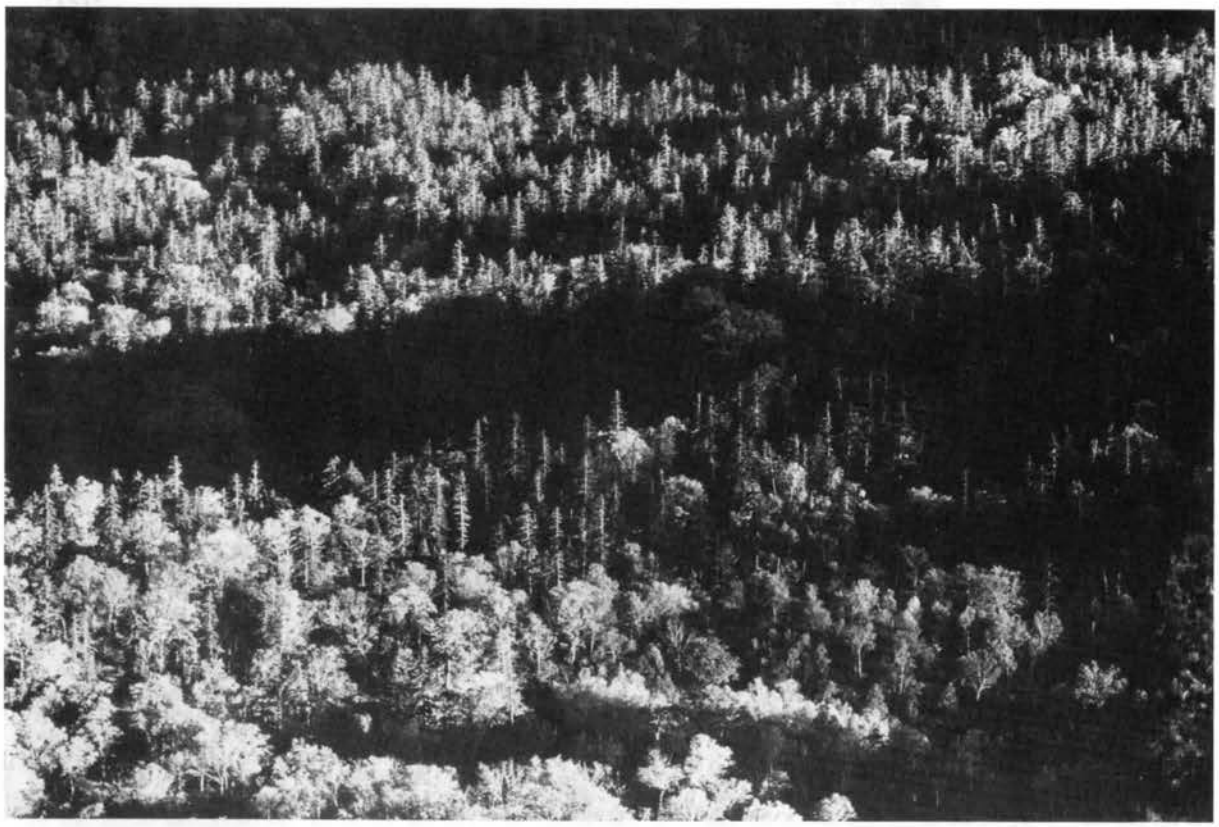
山と博物館

第39巻 第4号 1994年4月25日 大町山岳博物館

特集 水越 武写真展『日本の原生林』4/17～5/8



大雪山 撮影 水越 武

写真展開催にあたって

水越 武

私は山好きなこともあり、また自然を相手とする仕事柄、もう四〇年も山を歩いてきた。

しかし、日本の山のなかで本当に飲み水に困ったことはほとんど無い。外国の山を少し歩いた人間ならすぐに気づくことであるが、これはわが国が誇るべき、きわめて個性的な特徴と言える。

そしてまた、日本の山がどれほど豊かな森林を持っているかという証でもある。

日本列島は太陽の光と有り余るほどの水に恵まれ、緑の厚いベールのような森林に包まれていた。決して広い国ではないが、森林は他国に例を見ないような多様で変化に富んだ誇るべきものである。

われわれは有史以来、このような森林の恵みによって文化文明を育て、彼らに支えられ生きてきた。

それが近年、急速に進む経済優先の工業化の波に呑まれるように、山の奥まで森林の伐採が進み、日本列島から激しい勢いで原生林が姿を消していった。無論、日本アルプスも例外ではなく、私は山を歩きながら身近にこの様子を見てきた。環境問題に社会的な関心が高まり、保護の必要性が叫ばれながらも、今も確実にその姿を日々消している。

いつ頃からか私は、厳しい自然環境でひたむきに生きる山の生き物たちに心引かれるようになった。風が強く、雪の深い冬でも高山から下りようとしないライチョウたち、森林限界で死の世界と隣り合わせで必死に生きる木々、彼らの生き方に強い感動を覚え、自分の写真のテーマとして手がけてきた。

今や原生林も、われわれ人間が作り出した厳しい環境に立たされている生き物たちだと気づいた時、私は彼らを求めて旅立った。

この旅のスタートはもう二〇年も前のことになる。そして日本列島を何度も縦断する長い旅となって今も続いている。

このかけがえのない森林をじっくり見守り、私の力が尽きるまで心をこめて丹念に撮影して行きたい。

（写真家）

列島の原生林を追いかけて

水越　武

南北に三〇〇〇キロメートルと細長く弧を描くように横たわる日本列島は、亜熱帯から亜寒帯までの気候が存在し、決して広い国土を誇る国ではないが、多様で変化に富んだ森林植生をもっている。その森林の特徴として、春夏秋冬それぞれ移り変わる季節によって変化する豊かな表情、みずみずしい繊細な優しい美しさ、その上他国には例を見ないような複雑な植生などがあげられよう。

太古の日本列島は有り余る太陽の光と豊かな水に恵まれ、緑の厚いベールのような森林に包まれていたに違いない。

それが六〇年代以後、山の奥まで森林の伐採が急速に進み、激しい勢いで森が姿を消して行った。今では悲惨とでも言おうか、日本列島の原生林は見る影もないほど卑小化してしまった。

私はこの点々と残る原生林を一つずつ拾いあげ、列島を北から南まで縦断するような撮影行を二〇年間にわたり何度も繰り返してきた。

我が国の森林は大きく分けると五つの典型に区別できる。

一、南端の西表島などの亜熱帯林。
二、九州から黒潮とともに北上する照葉樹林。
三、北陸から東北にかけてのブナ林（夏緑林）。
四、日本アルプスを中心とした亜高山帯針葉樹林。
五、北海道の北方針葉樹林（汎針広混交林）。

私は少なく見積もっても一〇〇ケ所を下らない数の原生林を見て来た。今一つずつ思い出しても、どの森もそれぞれ違った特徴を持っていて私をひきつける魅力があった。ここに日本の原生林を代表する森林で、特に個性的で印象深かったものを幾つか紹介したい。

石鎚山のブナ

一、亜熱帯の西表島

山登りが好きで、なおかつ北方指向の強かった私は、日本アルプスや北海道の山はよく歩いたが、高い山がないこともあって屋久島より南には足を向けたことがなかった。

それが原生林をたずね歩くようになって、初めてこの亜熱帯の濃い緑に覆われた西表島に足を踏み入れた。ギラギラと輝く太陽の下で、初めて出会った島の生き物たちの形や色には強烈な印象を受けた。

赤や黄色の原色の花や蝶も珍しかったが、大地をのたうつ大きな板根をもつサキシマスオウノキや、背丈の三倍もあるような木性シダ、異様な化け物のような樹形のガジュマルなどに目を見張った。それに驚いたのは、海水と淡水の混じりあう潮間帯の河口に広がるマングローブ、四方に伸ばしたタコの足のような支柱根、動物のように空中の酸素を取り込む呼吸根をもつヒルギなど、不思議な生態を持つ植物たちの存在である。

二、海洋アルプスと言われる屋久島

この島の面白いのは、周囲一〇五キロメートルほどの黒潮に洗われる小さな島でありながら、九州一の高峰である宮之浦岳（一九三五メートル）を始めとした多くの山を抱えていることだ。

海岸にはヒルギやガジュマルが生い茂っているのに、山頂部は森林限界を抜けていて、標高によって亜熱帯から亜寒帯にいたる多彩な植生が見られる。温かく湿った空気が山に当たって激しい上昇気流を生み、「月に三十五日雨が降る」といわれるほど雨を降らす。海岸線は晴れている時でも、山の上は雲がかかっていることが多い。この雲霧帯と呼ばれる所に、樹齢数千年の屋久杉が林立している。なかでも一段と大きいのが縄文杉で、この七二〇〇年生き延びてきたといわれる巨木の前に立つと、いつも厳粛な気持ちになり、襟を正したくなる。

ヤンバルの森（沖縄本島）

三、珍しい照葉樹林の渓谷、綾渓谷

地元の人達は、この綾渓谷一帯に広がる照葉樹の保護に、早くから町をあげて取り組んできたと言う。最近は信州でも飯山市のようにブナの郷などとうたって、行政の側から原生林を守る運動を行い、村起こしの一環としての輪をひろげている所もあるが、綾町は町の憲章の中に、この照葉樹を守り続けるという一章を三十年も前に打ち出したと聞く。

スダシイ、アカガシ、ヤマモモ、ツバキなど照葉樹林は年中落葉することもなく、また

沖ノ島

秋になっても紅葉しない。そのため変化に乏しく、表情が豊かではないと言われてきたが、季節を変えて何度も訪れていると、意外に微妙な色彩の変化を見せるのに驚く。

初夏のシイやカシの花をつける時期は、これ以上に美しい緑の森は他にないと思われるほどのものであった。

四、荒海の孤島、沖ノ島

海の正倉院などといわれ、信仰の島として一般には上陸も禁止されていた沖ノ島は、荒海で知られる玄界灘にポツンと浮かんでいるような小さな島である。全島タブの原生林に覆われたこの孤島はいつも気になる存在で、私はいつか必ず訪ねたいものだと考えていた。

初夏の早朝に福岡から小さな飛行機で飛び立ち、紺碧の海の上を沖ノ島に向かった。小さく見えた島が、どんどんと成長するように大きくなってくる。楕円形の島の回りは断崖で、白い波に洗われている。所々、風衝地の草地が目につくとは言え、ほとんど島全体が濃い緑に覆われている。窓からシャッターをきりながら、本当に長い間の希望がかなった、という深い喜びが心の底から湧いてきた。

五、本州最多雨の森、大台ケ原

大台ケ原はどこに頂上があるか分からない、なだらかな高原のような所で、そのため標高のもっとも高い日出が岳の名は知られていない。準平原といわれる地形だが、年平均の降水量は四八〇〇ミリもある。これは本州最多雨の記録で、この豊かな雨量がもたらす森林が、厚い緑のカーペットのように隈無く山全体を包んでいる。一昔前までは、この原生林と林床に敷き詰めたようによく発育した緑の苔が、大台ケ原を象徴する存在であった。しかし近年はシカが異常に増え、その食害でトウヒが無残に立ち枯れている。そのため光が森に入り過ぎて苔がすっかり姿を消し、代わりにササが侵入して繁茂している。

六、社寺林、伊勢神宮

クマ、シカ、イノシシなど大型獣まで確認されていて、この森の規模の大きさと、多彩な自然が息づく豊かさが想像できる。一般の参拝者も内宮、外宮の森の中では、神秘的で近寄り難い崇高な神々に合掌する気持ちにさせられる。このような心理的効果を十分に承知したうえで、境内の森を大切にして来た。これが幸いして、我々が身近に触れることのできる照葉樹林を残す結果となった。

東海地方で生まれ育った私は、休日は照葉樹の森で一日中、花や虫や小鳥と過ごした。日中でも薄暗い鎮守の森で遊んだことを懐かしく思い出す。この時期に森にこだわる心が育まれた、と私はいま考える。

七、故郷の森、面ノ木峠のブナ

この私の故郷の奥三河の山には昔よく登った。一〇〇〇メートルを僅かに超える山々で、日本アルプスの山に行くようになると目を向けることもなくなった。しかし原生林を追いかけるようになって、奥三河の山が盛んに気になりだした。それは、空気まで緑に染まったような林間でのキャンプ生活の記憶が鮮明に私の中に残っていたからだ。今考えると間違いなくブナの森で、当時は一〇〇〇メートル前後のこの地域一帯は、すべて太平洋型ブナ林に埋め尽くされていたと考えられる。

しかし四十年後の今、県内に原生林といえるような森は、面ノ木の小さな山の側面だけとなってしまった。悲しいことには、そこは本当に一匹のカモシカ、一匹のキツネのテリトリーとしても不十分の面積でしかない。愛知県は産業が盛んで人口密度が高い県とはいえ、何ともやりきれない気がするのは私だけではあるまい。私の故郷だけが特別ではなく、同じような県は他にも幾つか数えられる。

思いつくままに南から一つづつ取り上げ北上してきたら、中部山岳の森林まで到達しないうちに、私に許されたスペースが無くなってしまった。これは日本列島に、いかに多く忘れ難い素晴らしい森が、宝石をちりばめたように点在するかというように解釈して頂けたら幸いである。

アカエゾマツ（阿寒）

原生林は人工林と比較して、いつまでも印象が鮮烈である。その緑濃い森林の中は、野鳥や昆虫など動物の種類も多ければ草木も多彩で、驚くほど豊かな命が共生し息づいている。人工林が造花なら原生林は生花であり、そこには生命の美しさ、不思議さが満ちているといえよう。

どの森も個性的で掛け替えのないものばかりであるが、それぞれなんらかの難しい問題をはらんでいて、いつまで安泰であるか保証の限りではない。

最後に、厳密にはもはや原生林といえるような森林は現在の日本には無い。人間の影響をほとんど受けていない自然林を原生林と見なして、私は話を進めてきた。

（日本写真家協会会員）

博物館だより

平成6年度の企画展開催予定

今年度の企画展案がまとまりましたので、お知らせいたします。

水越武写真展―「日本の原生林」

期間　4月17日(日)～5月8日(日)

写真家・水越武氏が日本における原生林を撮影した作品50点を展示。（通常料金）

「春の草花と山菜展」

期間　5月21日(土)～5月24日(火)

野草の鉢植え約一五〇点、野の花の生け花約30点を展示。（入場無料）

「動物写生画展」

期間　7月2日(土)～7月10日(日)

5月5日に大町市内の保育・幼稚園児と小中学生を対象に行なわれる「春の写生大会」で寄せられた全作品を展示。（入場無料）

「日本山岳画協会大町展」

期間　7月23日(土)～8月21日(日)

山岳画協会員作品40点を展示。（通常料金）

「日本板画院長野支部展」

期間　9月11日(日)～9月18日(日)

日本板画院長野支部会員作品一〇〇点を展示する。（入場無料）

「秋の草花とキノコ展」

期間　9月23日(祝)～9月25日(日)

野の花の生け花30点、キノコの液浸と生の標本各約一〇〇点を展示。9月25日(日)には恒例のキノコ鑑定会も予定。（入場無料）

「フォッサ・マグナ展」

期間　10月16日(日)～11月3日(祝)

日本列島中央部を横断し、東西日本の境とも見られているフォッサ・マグナは、長野県の約½の面積を占めている重要な地質構造地帯です。それを化石・岩石、地形図、生物標本などで分かりやすく展示します。（通常料金）

バックナンバーのお知らせ⑽

次の巻号のバックナンバーがあります。内容は主なものの紹介ですが、ご了承ください。

第30巻第1号（昭和60年1月）
ウエストンとハーン　三井嘉雄
雨飾山の植物　池上睦美

第30巻第2号（昭和60年2月）
カブトエビのこと　秋田正人
遺跡出土の炭化物について　森　義直

第30巻第3号（昭和60年3月）
アブ　この愛しきものよ　山口博視
野草シリーズ　裏日本系植物について　保尊裕之

第30巻第4号（昭和60年4月）
福岡孝行先生を偲んで　丸山　彰
欧米の動物園を巡って　内川公人

第30巻第5号（昭和60年5月）
鷹狩山の小鳥たち　腰原正己
チロルの少数動物を守る　ヘルムート・ペヒラーナ

第30巻第6号（昭和60年6月）
野草シリーズ　夏の草花　保尊裕之
大町市のトンボ類　枝　重夫

第30巻第8号（昭和60年8月）
アルプス・マーモット近況報告　宮野典夫　峯村　隆

第30巻第9号（昭和60年9月）
高山植生の復元にとりくむ　土田勝義
北安曇の焼餅　金子万平

第30巻第10号（昭和60年10月）
北安曇郡における長野県西部地震の震度分布について　木船　清
山の神　臼井　潤

第30巻第11号（昭和60年11月）
ハレー彗星を見よう　丸山卓哉
秋田県におけるニホンカモシカ　テレメトリー法による追跡調査概報(1)　米田一彦

第30巻第12号（昭和60年12月）
大北地方を中心とした餅と餅搗き慣習　青木　治
秋田県におけるニホンカモシカ　テレメトリー法による追跡調査概報(2)　米田一彦

第31巻第1号（昭和61年1月）
長野時代の志村烏嶺　峯村　隆
エンコ・ツクベル・ネマル―北アルプス東麓の方言(1)―　福沢武一

第31巻第2号（昭和61年2月）
尾崎喜八先生を想う　丸山　彰
ズク（根気）の縁語―北アルプス東麓の方言(2)―　福沢武一

第31巻第3号（昭和61年3月）
オオカミへの挽歌　宮尾嶽雄
ガ・ガン・ガニの類―北アルプス東麓の方言(3)―　福沢武一

第31巻第4号（昭和61年4月）
動物たちの落し物、残し物　千葉彬司
白馬とわたし　高田正二郎

第31巻第5号（昭和61年5月）
木崎湖の魚類の変遷とその要因　中村一雄
長野県におけるモリアオガエルの分布　宮田　渡

第31巻第6号（昭和61年6月）
河野齢蔵と信州理科教育　長沢　武
クタタメル―北アルプス東麓の方言(4)―　福沢武一

第31巻第7号（昭和61年7月）
座談会〝日本水彩画会　長野大町展〟をまえに

第31巻第8号（昭和61年8月）
日本・中国合同登山研修会　中国チベット　チャンツェ峰　松原　繁

第31巻第9号（昭和61年9月）
国立公園五十年の歩み　大井道夫
食習としゃもじ渡し―北アルプス山麓地方の食生活(1)―　青木　治

バックナンバーの請求方法

右記にご希望のものがありましたら、一部一〇〇円でおわけします。巻号と部数を明記のうえ、現金書留か口座振替で大町山岳博物館宛ご送金ください。（送料当方負担）

郵便振替口座番号変更のお知らせ

平成六年五月より次のとおり変更となります。

現在の番号　長野四―一三二九三
新たな番号　〇〇五四〇―七―一三二九三

山と博物館第39巻第4号
一九九四年四月二十五日発行
発行所　〒398 長野県大町市　TEL(22)〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額一、五〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一三二九三）